

W-BRIDGE

'11 年度活動報告



W-BRIDGE

Waseda-Bridgestone Initiative for Development
of Global Environment



Message

地球環境保全のための「架け橋」を目指して

早稲田大学と株式会社ブリヂストンが連携して進める「W-BRIDGE」は、環境問題という人類共通の課題に対し、産学連携に加え、環境 NGO や市民団体といった一般の生活者の方々にも参画いただき、三者一体で研究・活動を行える枠組みを提供するプロジェクトです。企業と大学の連携に、地域の生活者との連携をプラスして、二つの架け橋、つまりダブルブリッジに基づいた実践的な研究・活動を支援していくことを目的としています。

2008 年 7 月のスタート以来、のべ 55 件のプロジェクトを支援してきました。研究者と市民そして学生の間に架け橋をわたして、ともに地球環境を守るための研究・活動を進めています。

世界的な業績を上げた研究者や著名な NPO 活動者から、それぞれの地域で生活と環境を守っているみなさん、未来への希望に満ちた学生まで一緒に手を携えて行動をしています。ちょっと照れくさいですが、地球とみんなの「しあわせ」を目指して。

W-BRIDGE (Waseda-Bridgestone Initiative for Development of Global Environment) は早稲田大学環境総合研究センター内に設置された産学連携プロジェクトです。

以下に示す株式会社ブリヂストンが定めた 4 つの領域で募集を行い、早稲田大学および早稲田大学提携校等に所属する研究者と民間団体などの連名で応募いただき、審査委員会および運営委員会の審査を経た案件に対し、早稲田大学環境総合研究センターから研究・活動を委託しております。

1. 企業や生活者がともに自然と共生していく方法を考える
2. 資源を大切に使い循環させる仕組みを、生活者とともに考える
3. 2050 年の視点から CO₂ を減らす方法を、生活者とともに考える
4. 環境保全の知見や手法を世界にひろげ、次世代と共に学ぶ方法を考える

※2011 年 7 月から新領域が設定されました。2011 年 6 月までの 4 領域については、5-19 ページをご覧ください。

また、研究・活動を支え、情報を発信する活動も併せて行っています。2011 年 11 月 1 日現在、のべ 55 件のプロジェクトが採択されており、(うち 17 件はすでに目標を達成して終了) 対象地域もインドネシアから早稲田の町内会まで、特に今年は東日本大震災の被災地に直接関係するプロジェクトも 4 件あります。研究代表者も早稲田大学、東京工業大学、九州大学、岩手大学、茨城大学など、民間団体も海外の NPO から、商工会、地域団体、ジャーナリスト団体など多様な広がりを見せています。

本レポートの内容は、W-BRIDGE プロジェクトの第三期の活動の概要を表したものです。詳細は、Web サイト (www.w-bridge.jp) をご覧いただくか、W-BRIDGE 事務局 (連絡先は裏表紙に記載) までお問い合わせください。





写真 上：(岩井プロジェクト)
現地小学校での環境教育



下：(秋吉プロジェクト)
実習地の子どもと休憩中



ご挨拶

代 表 堀口健治

W-BRIDGE (Waseda-Bridgestone Initiative for Development of Global Environment の略) は、地球環境の保全に貢献するために、早稲田大学と株式会社ブリヂストンの連携で、早稲田大学環境総合研究センター内に設置された産学連携プロジェクトで、地球環境分野において、従来の産と学の連携に、地域の生活者との連携を加えた二つの架け橋、つまりダブルブリッジに基づいた実践的な研究・活動を支援し、その成果を広く発信していきます。

早稲田大学は、環境分野においては、理工学系と人文社会科学系が協働して問題に取り組むことが重要であるとの認識から、学問領域統合型のアプローチを旨とする環境総合研究センターを設置して活発な研究展開を行うとともに、大学院環境・エネルギー研究科を設置して、時代の課題に応えた大学院教育を展開して参りました。

株式会社ブリヂストンは、環境宣言に掲げる“未来のすべての子どもたちが「安心」して暮らしていくために…”という変わらぬ思いのもと、かねてから経営の最重要課題の一つとして環境経営活動を積極的に実践して参りました。すなわち、生産活動における環境負荷軽減をはじめとし、環境対応商品の開発・販売やリトレッド事業の展開など、広範囲な事業領域だけでなく、地域的な広がりもふまえた多様性のある活動を展開して参りました。



写真 左：(島谷プロジェクト)
加茂湖再生プロジェクトの看板
中：(加藤プロジェクト)
菜の花プロジェクトの畑の看板
右：(森川プロジェクト)
南カリマンタンの植林予定地の看板



そして双方は、日々深刻化する地球環境問題解決の道筋を明らかにするという、企業および大学の社会的使命を果たしていくためには、従来の企業と大学の連携の枠を超えた、人々の生活により近づいた取り組みが必要だと考え、2008年7月に当プロジェクトをスタートさせました。

地球環境問題は、人類、ひいては全ての生物に関わる問題であり、その解決のための研究は、地域に生活する人々による実践的なものでなければなりません。本プロジェクト設立の意図は、生活者としての一般の人々に参加して頂けるような枠組みを作ることです。本当に持続可能な社会を実現していくには、人間の生活というものを無視して進めることはできません。地域で実生活に根ざした活動をされているNPOやNGO、そして一般の方々を、産学の連携に巻き込み、一緒に課題解決に取り組んでいく、そういう三者連携の新しい枠組みで、地球規模の問題解決に貢献していきたい。また、得られた成果は広く世の中に発信し、多くの方々に活用していただけるようにしていきたいと、当プロジェクトは考えます。

皆様におかれましては、当プロジェクトの趣旨をご理解いただき、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。





第1領域

「地球規模の多様な環境問題解決の架け橋」

（地球温暖化対策と生物多様性保全等の連携の道筋を開拓）

この領域は、地球温暖化対策と生物多様性保全のバランスを考えることを目的としています。

（2011年6月までの領域）

荒廃地における森の再生

＜研究・活動名＞熱帯荒廃地における生物多様性に配慮した森林修復と環境教育

＜代表者 / 団体＞早稲田大学人間科学学術院教授 森川靖 / （財）国際緑化推進センター

世界的に、通常の植林活動では地域住民の継続的な便益がなく、植林地が持続しない例が多いなどの問題点が明らかとなっています。そのため、本プロジェクトでは、インドネシア・南カリマンタン地域で生物多様性に配慮した森林修復（緑の回廊）と環境教育などを展開しています。W-BRIDGE モデルと命名された新しい植林モデルが、他プロジェクトを実施する際の具体的な指針となると期待されます。（2009 年 1 月より半年に 1 回の審査を受け、現在は新しい領域で継続中（7 ページ参照））

地域の人々と学生の交流からごみ問題を考える

＜研究・活動名＞若者世代が「環境配慮意識」を「実際の行動」に移す要因の研究およびマレーシア在住フィリピン人集落における衛生環境改善活動

＜代表者 / 団体＞早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター助教 岩井雪乃 / WAVOC「海外ボランティアリーダー養成プロジェクト（ボルネオ）」

マレーシア・サバ州・コタキナバル市において、急増しているフィリピン人移民集落でのごみ堆積問題に対して、その改善のための研究・活動を行っています。本プロジェクトは、NHK で活動内容が放映されたり、学生 OB・OG を巻き込んだ各種活動が派生するなど、大きな期待と注目を浴びています。（2009 年 1 月より半年に 1 回の審査を受け、現在は新しい領域で継続中（7 ページ参照））

持続可能な国内森林利用の方向性を探る

＜研究・活動名＞地球温暖化対策を念頭においた持続可能な森林利用の方向性を探る研究

＜代表者 / 団体＞慶應義塾大学大学院政策メディア研究科教授 金谷年展 / NPO 法人バイオマス産業社会ネットワーク

地球温暖化対策のために、森林の利用を進めることが提唱されていますが、その適正さの基準は必ずしも明らかになっていません。本プロジェクトでは、我が国における地球温暖化対策を念頭に置いた森林利用の方向性を、専門家や生活者とともに協議するプラットフォームを形成したもので、木質バイオマス熱利用の重要性など政府機関の政策などにも大きな影響を与えました。（2009 年 7 月より半年に 1 回の審査を受け、2011 年 6 月に終了）



写真 上段：(森川プロジェクト)
南カリマントン集合写真と
ゴムノキ、マホガニー (円内左、右)、論文表紙
中段：(岩井プロジェクト)
現地小学校での環境教育 (左、右)
下段：(金谷プロジェクト)
研究発表会

2011年7月～2012年6月期

新規採択案件

株式会社ブリヂストンが定める研究領域が新しくなり、2011年4月より新たな領域のもとで公募が実施されました。

応募に当たっては東日本大震災対応案件も求めた結果、4件の被災地支援を直接目的としたプロジェクトが採択された他、W-BRIDGE プロジェクト関係者が積極的に被災地支援に関わっております。

採択プロジェクトの詳細は、ホームページにてご確認ください。

◎企業や生活者がともに自然と共生していく方法を考える

- ・企業 CSR を通じた「農山村ー都市」連携（継続）
- ・インドネシア南カリマンタン州の大森林公園における生物多様性修復（継続）
- ・若者の持続的な食意識の向上を促す農林業体験ツアー構築に向けた研究（継続）

◎資源を大切に使い循環させる仕組みを、生活者とともに考える

- ・地域連携で生み出すいばらきエコ・ネットワーク STEP3（継続）
- ・新潟県佐渡市トキ舞う加茂湖の水辺再生プロジェクト Phase2（継続）
- ・女性生活者による3R活動による地域貢献について（継続）
- ・利用者視点から見た2R（Reduce, Reuse）の普及促進に関する実証研究（新規）
- ・やんばる国頭の森の水路再生・棚田ビオトープ整備による地域活性化プロジェクト（継続）

◎2050年の視点からCO₂を減らす方法を、生活者とともに考える

- ・東北復興を契機に日本を持続可能な社会へ（新規）
- ・被災地を中心とした地域復興のための再生可能エネルギー実装に関する研究（新規）
- ・学生と地域がともに取り組む環境ビジネスの創出（新規）

◎環境保全の知見や手法を世界にひろげ、次世代とともに学ぶ方法を考える

- ・学生ボランティアと地域活性化による環境保全の連携に関する研究（継続）
- ・大震災・原発事故 VS 科学・宗教ー社会規範再形成への実証研究（新規）
- ・日本とマレーシアの国際交流による環境意識の育成（継続）
- ・豊島発 歴史、文化と環境学習融合プログラムの開発（新規）



W-BRIDGE へのメッセージ



「環境はすべからず地域の問題である」といわれます。世界、日本の各所とそれぞれに異なった様相で、環境的課題が生まれます。ですから真の問題解決は、地域で地域の住民によってでしか達成できません。最近になって従来型の、分野で区切られ、その中での精緻化を求める従来科学の反省として Sustainability Science の考え方こそ社会における科学の新しい方法であるとの流れが出てきており、将来主流になると考えられています。

W-BRIDGE プロジェクトは、まさに今の世界で養成される科学を実地に進めるものとして大きな意味をもつものです。大学の知と住民の行動の組み合わせで社会改革をボトムアップで実践するというユニークな試みを見守っていきたいと考えています。

国立環境研究所特別客員研究員 西岡秀三さん

W-BRIDGE のロゴデザインを拝見したところ、このWとBの間に秘かに二重橋がかかっていることに気づきました。この二重橋の意味が相当に大きいことなのではないかと思われ、素晴らしいプロジェクトになり得るのではないかという期待感を持っています。

ブリヂストン、早稲田大学といった世界的に著名でそれぞれの歴史を持つ、この両者が協働した横断的なプロジェクトで、かつ市民の方々も引き込んでいくという壮大なプロジェクトということにも、驚きを隠せません。

W-BRIDGE で取り組む環境問題は、まさに多様性に富んだものであって、理論・研究だけでなく一つ一つの実践がベースになるものだと思います。市民の方々も交えるということで、企業と大学の連携が、一人一人の生活者の中に何か芽生えるものになっていくようなプロジェクトになることを期待しています。

(株)NHK エンタープライズ エグゼクティブプロデューサー
松尾典子さん



アドバイザー・ボード

W-BRIDGE には本プロジェクトの趣旨にご賛同いただいた各界の専門家から構成されたアドバイザー・ボードが設置されています。研究領域・研究成果に対して随時助言をいただき、活動内容に反映しています。

(敬称略、五十音順)

- 池上清子 (環境と開発途上国問題の専門家)
- 大橋 力 (文明科学研究所長 / 芸能山城組主宰)
- 小畑秀文 (東京農工大学特別招聘教授)
- 崎田裕子 (ジャーナリスト・環境カウンセラー)
- 西岡秀三 (国立環境研究所特別客員研究員)
- 原 剛 (早稲田環境塾塾長)
- 三村信男 (茨城大学教授 / IPCC メンバー)
- 渡辺弘之 (京都大学名誉教授)



「いかしつつ守る環境活動者のグローバルな架け橋」

(持続的な人間活動と環境保全活動にかかわる人々の共通の理解と連帯の形成)

この領域は、人々の生活と環境保全活動のバランスを考えることを目的としています。
(2011年6月までの領域)

ごみの島から「人のつながり」の島へ再生

＜研究・活動名＞離島におけるバイオマス資源活用システムに関する研究

＜代表者 / 団体＞早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科助教 切川卓也 / 豊島再生「食プロジェクト」推進協議会

戦後最大級の廃棄物不法投棄事件が発生した瀬戸内海の“豊島（てしま）”をモデルとして自然環境と地域再生、とりわけ地域資源の活用システムの構築に焦点を当てた研究・活動を展開しました。本プロジェクトは総務省の緑の分権改革推進事業モデル地区に採択され、発展的にプロジェクトを終了しました。(2009年1月より半年に1回の審査を受け、2011年6月に終了)

大学と地域と農のネットワーク

＜研究・活動名＞本庄里山キャンパスにおける生物多様性市民モニタリング手法の構築

＜代表者 / 団体＞早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科教授 紙屋雄史 / NPO 法人早稲田環境市民ネットワーク

地域の里山や農業の課題に大学と市民が共同で取り組むことで、新しい地域との関係創造につながる社会モデルを構築するために、埼玉県本庄市の早稲田大学キャンパス周辺で生物多様性市民モニタリング手法の構築に取り組み、今後につながる様々な成果を得てプロジェクトを終了しました。(2009年1月より半年に1回の審査を受け、2011年6月に終了)

天然ゴムの持続的生産に関する研究・活動

＜研究・活動名＞中国における天然ゴムの持続的生産に関する研究・活動

＜代表者 / 団体＞富山県立大学工学部教授 佐藤幸生 / 雲南省昆明植物園

中国における天然ゴムの持続的生産に関して、生物多様性および環境経営・政策的視点からの予備的研究を行いました。これらの成果は今後W-BRIDGE プロジェクト全体の活動に引き継がれる予定です。(2011年1月より半年間活動を実施し終了)



写真 上段：(切川プロジェクト)
 豊島の風景と(左から順に)地元海産物、
 温室、豊島共創グリーンマップ
 下段：(紙屋プロジェクト)
 芋植え生物観察(上)
 落ち葉堆肥つくり(中)
 原木シイタケ菌コマ打ち込み作業(下)



企業や生活者がともに自然と 共生していく方法を考える

「企業 CSR と地域交流」(p17)

「『荒廃地』における森の再生」(p5)

「農と食と緑の学校」(p13)

環境保全の知見や手法を世界にひろげ、 次世代とともに学ぶ方法を考える

「じよんのびプロジェクト」(p17)

「日本とマレーシアの国際交流による環境意識の育成」(p5)

新規プロジェクト

「大震災を考えるプロジェクト」(p7)

「島の歴史、文化と環境学習の融合」(p7)

2050年の視点から CO₂ を減らす方法を、 生活者とともに考える

新規プロジェクト

「東北復興を契機に日本を持続可能な社会へ」(p7)

「被災地再生可能エネルギー」(p7)

「学生と地域がともに取り組む環境ビジネスの創出」(p7)

終了プロジェクト

「持続可能な国内森林利用の方向性」(p5)

「ごみの島から『人のつながりの島』へ再生」(p9)

「大学と地域と農のネットワーク」(p9)

「天然ゴムの持続的生産に関する研究・活動」(p9)

「全国学生環境ビジネスコンテスト」(p13)

「熟議とファシリテーション」(p15)

「サステナブル都市新宿」(p17)

「環境日本学の世界への発信」(p19)

「文明と環境に関する知の対話」(p19)

W-BRIDGE プロジェクトマップ

資源を大切に使い循環させる仕組みを、 生活者とともに考える

「いばらきエコ・ネットワーク」(p13)

「トキの生育環境保全」(p15)

「女性生活者による3R活動による地域貢献」(p18)

「やんばるの森」(p15)

新規プロジェクト

「利用者視点から見た2R (Reduce, Reuse) の普及促進」(p7)

（第2領域 つづき）

地域で取り組むいばらきエコ・ネットワーク

＜研究・活動名＞地域連携で生み出すいばらきエコ・ネットワーク STEP2

＜代表者 / 団体＞茨城大学地球変動適応科学研究機関（ICAS）准教授 田村誠 / 城里町商工会・筑西市商工会エコの木プロジェクト部会

茨城県城里町商工会と筑西市商工会が地域取り組みの実施主体となり、茨城大学はそれらと人と技術でつなぎ、「生活者」が生き生きと展開させる「コミュニティ」とその有効性の科学的検証が進められています。2011年3月の東日本大震災で特に城里町が大きな被害を受けましたが、若干の計画変更で乗り切り、被災地の復興にこれらの経験を活かす動きが出るなど、大きな注目を浴びるプロジェクトとなっています。（2009年1月より半年に1回の審査を受け、現在は新しい領域で継続中（7ページ参照））

農林業体験を通じて若者へ食と環境の問題を提起する

＜研究・活動名＞農林業体験を通じた若者への環境問題提起 ～食行動変容からの検証～

＜代表者 / 団体＞早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター助教 秋吉恵 / WAVOC「農と食と緑の学校 in おけら牧場・ラーバンの森」

今後の社会を担う学生には、実際に農山村に行き、日本の農業や食、雑木林の役割や環境問題を現場から考えることが求められる側面があるといつてよいでしょう。また、学生の食生活を変える食行動の変容と現場の体験との相関関係も解明すべき課題です。最初は少人数でスタートした本研究・活動も、今は大所帯となり今後の進展が期待されています。（2009年7月より半年に1回の審査を受け、現在は新しい領域で継続中（7ページ参照））

学生が未来のエコビジネスを開く

＜研究・活動名＞全国学生環境ビジネスコンテスト em factory

＜代表者 / 団体＞早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科教授 西尾哲茂 / 早稲田大学環境NPO 環境ロドリゲス em factory

環境配慮型のビジネスモデルの構築や、環境とビジネスのバランス感覚を持った学生人材を輩出することを目指し、全国学生環境ビジネスコンテスト em factory の開催や学生と企業との環境問題を通じたインタラクティブプロジェクトの推進を行っています。ビジネスコンテストの成果が実際ビジネス化されるなど着実に成果が上がっています。（2009年1月より半年に1回の審査を受け、2011年6月に終了。現在、発展プロジェクトを新しい領域で実施中（7ページ参照））



写真（田村プロジェクト）
ソーラーパネル、コントローラー、バッテリーを
設置したアルミ折りたたみ式リヤカー（右）
非常用電源として電動バイクを充電中（左）



写真（秋吉プロジェクト）
石窯作り（左上）
鶏の解体の手順説明（右）
参加者が作った料理（左下）



写真（西尾プロジェクト）
全国学生環境ビジネスコンテスト

(第2領域 つづき)

貴重な鳥の生育環境保全ネットワーク その1 (沖縄やんばるの森)

＜研究・活動名＞やんばる国頭の森の持続可能な森林資源管理に関する研究

＜代表者 / 団体＞東京工業大学大学院社会理工学研究科・価値システム専攻教授 桑子敏雄 / NPO 法人国頭ツーリズム協会

貴重な鳥「ヤンバルクイナ」の生育地としても知られる沖縄本島北方の国頭村において、地域経済と生態系の保全をどう両立させるかという観点から、森林利用のゾーニング手法の研究や資源を生かした生業づくりの活動を進めており、他地域での応用可能なモデルづくりを続けています。(2010年7月より半年に1回の審査を受け、現在は新しい領域で継続中(7ページ参照))

貴重な鳥の生育環境保全ネットワーク その2 (佐渡島、トキ)

＜研究・活動名＞新潟県佐渡市トキ舞う加茂湖の水辺再生プロジェクト

＜代表者 / 団体＞九州大学大学院工学研究院環境都市部門教授 島谷幸宏 / 佐渡島加茂湖水系再生研究所

貴重な鳥「トキ」の生育地としても知られる新潟県佐渡島加茂湖周辺において、地域住民と研究者が一体となった合意形成、環境学習、小中学生も含めた水辺再生プラン作り、市民工事手法の導入による再生の一步を実現しました。今後、他地区においても導入される可能性のある新たなコンセプトが作られつつあります。(2010年7月より半年に1回の審査を受け、現在は新しい領域で継続中(7ページ参照))

熟議とファシリテーション

＜研究・活動名＞環境問題解決のための「場」作り実践の分析 - 「熟議」と「ファシリテーション」

＜代表者 / 団体＞早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科教授 友成真一 / re:connect

環境問題解決のための「場」作り実践を目的として、W-BRIDGEの学生プロジェクトから派生した新規プロジェクトです。熟議とファシリテーションの実践と理論化を目指した方向性は、2011年3月の東日本大震災後ますます重要なものとなりつつあります。これらの成果は今後W-BRIDGEプロジェクト全体の活動に引き継がれる予定です。(2010年7月より半年に1回の審査を受け、2011年6月に終了)



写真 上段：(桑子プロジェクト)
森林の自然資源調査 (左)

(友成プロジェクト)
リコネクトワークショップ (右)

下段：(鳥谷プロジェクト)
水辺再生作業 (中)
作業実施前の風景 (左上)
作業実施後の風景 (右下)



第3領域



「たしかな未来へのたしかな架け橋」

(中長期目標設計とバックキャストिंग手法によるアクション設計)

この領域は、次世代からの視点で目標を定め、効果的で効率的な環境改善手法を考えることを目的としています。
(2011年6月までの領域)

地域住民とともに創る「サステナブル都市新宿」

＜研究・活動名＞現実的なバックキャストिंगを実践する学生コンサルタントの育成

＜代表者 / 団体＞早稲田大学環境総合研究センター准教授 小野田弘士 / 新宿区エコ事業者連絡会

都市部における温暖化対策の具体的な方法論をモデル的に提示することを目的として、早稲田大学が保有する省エネ・省CO₂技術を活用して大学構内の自販機利用改良など様々な実績を上げるとともに、早稲田大学と新宿区が連携して行う人材育成プロジェクトにコンセプトが引き継がれ、プロジェクトを終了しました。(2009年1月より半年に1回の審査を受け、2011年6月に終了)

学生が担う地域活性化と環境保全

＜研究・活動名＞学生ボランティアと地域活性化による環境保全の連携に関する研究と実践

＜代表者 / 団体＞早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター助教 加藤基樹 / WAVOC まつだい 早稲田じよんのびプロジェクト

新潟県十日町市を拠点に、地域と密着した冬季の雪かき支援、棚田米づくり、菜の花プロジェクト、地域の人々とともに創る広報誌などを通じて、次世代への活動の継承と幅広い年齢層の参加が可能なシステム構築が進みつつあります。このプロジェクトは、地域の方々の評価も高く、全国的なモデルの一つとしての成長が期待されています。(2009年7月より半年に1回の審査を受け、現在は新しい領域で継続中(7ページ参照))

企業 CSR と地域交流

＜研究・活動名＞企業の A-EMS と CSR-MS による地域交流と健康増進

＜代表者 / 団体＞早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科教授 黒澤正一 / NPO 法人栄村ネットワーク

ISO26000 準拠の本業 CSR を基盤として、企業が生活者とともに積極関与する「農山村と CSR 企業の連携」の研究と実践を目指しています。本プロジェクトのフィールドである長野県栄村は3月の大震災で震度6強の揺れがあり、壊滅的な被害を受けましたが隣村の協力などもあり、プロジェクトは進行するとともに、全国に適用できるモデルづくりとして成果を上げています。(2010年7月より半年に1回の審査を受け、現在は新しい領域で継続中(7ページ参照))

女性から見た環境・社会貢献活動

＜研究・活動名＞女性生活者からみた環境・地域貢献の在り方に関する研究 ～地域版環境ベルマークへの基礎研究～

＜代表者 / 団体＞大阪市立大学大学院創造都市研究科准教授 永田潤子 / NPO 法人中部リサイクル運動市民の会

環境に対する意識が女性と男性ではかなり異なることをベースとし、女性生活者による3R活動を通じた環境問題の解決を推進するために、①社会に働きかけるコンセプトと個人へのメッセージからのアプローチ検討と実証実験 ②ビジネスモデルとして持続可能性を担保する仕組みに関する研究などを進めています。(2010年7月より半年に1回の審査を受け、現在は新しい領域で継続中(7ページ参照))



写真 上段：(加藤プロジェクト)
(左から時計まわりに) 雪かき支援、じょんのび米
棚田米の田植え、広報誌
下段：(小野田プロジェクト)
大学構内の自販機(左)
(黒澤プロジェクト)
シンポジウム(中)
(永田プロジェクト)
名古屋エコロジーセンター(右)



第4領域

「地域と世界を生き生きとつなぐ環境情報の 架け橋」

(環境情報の世界発信を通じた日本および各地域の共時的精神空間の形成)

この領域は、環境に関する情報を世界へ効果的に発信し、コミュニケーションする手法を考えることを目的としています。
(2011年6月までの領域)

環境日本学の世界への発信

＜研究・活動名＞地域社会との連携による環境日本学の創成とその情報発信システムの構築

＜代表者 / 団体＞早稲田大学アジア太平洋研究科教授 天児慧 / 日本環境ジャーナリストの会

地域社会との連携による環境日本学の創成とその情報発信システムの構築を進めています。その成果は「高畠学」として出版された書籍の一部に反映されるなど、震災後の社会の方向性を示したものとして高く評価されています。(2010年7月より半年に1回の審査を受け、2011年6月に終了)

文明と環境に関する知の対話

＜研究・活動名＞W-BRIDGE の成果を踏まえた環境・文明・完成に関する知のリーダーの対話 — 東洋的感性を世界に発信する —

＜代表者 / 団体＞早稲田大学国際部准教授 江正殷 / 文明と環境を考える会

W-BRIDGE の成果を踏まえた環境・文明・感性に関する知のリーダーの対話を行うことにより、東洋的感性の世界への発信を試みています。その成果はW-BRIDGE プロジェクト全体に引き継がれ、とりわけ東日本大震災後の情勢を踏まえた書籍の発行によって発表される予定です。(2010年7月より半年に1回の審査を受け、2011年6月に終了)

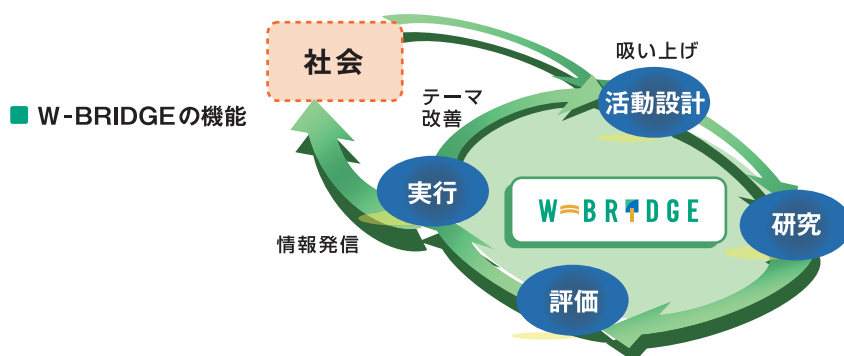


写真 (天児プロジェクト、江プロジェクト合同)
日中環境問題セミナー (左、右)

W-BRIDGE では、その目指す機能を十分に発揮するために、下記の活動も併せて行っています。

- ・ 効率的な研究・活動を実施するための情報収集、評価指標の開発実施
- ・ 研究・活動委託のとりまとめと個別研究・活動の支援
- ・ シンポジウム・研究発表及びイベントの開催
- ・ 環境活動・環境教育支援
- ・ 情報発信（公開講座、活動報告、出版、ホームページ等の実施）

写真 W-BRIDGE が企画、運営面で支援を行なった
ブリヂストン森林教室 in エコピアの森



◆執行組織（運営委員兼任）

代表	堀口健治（早稲田大学）
副代表	堀尾正靱（早稲田大学）
副代表	勝田正文（早稲田大学）
副代表	平田 靖（ブリヂストン）
研究マネジメントチームリーダー	岡田久典（早稲田大学）
事務局長	永井祐二（早稲田大学）
研究員	中島勇介（ブリヂストン）

◆運営委員

松田 明（ブリヂストン）	大聖泰弘（早稲田大学）
濱田隆次（ブリヂストン）	永田勝也（早稲田大学）

W-BRIDGE

'11 年度活動報告



2011 年 12 月 15 日 発行

発行 早稲田大学環境総合研究センターW-BRIDGE
〒162-0041

東京都新宿区早稲田鶴巻町 513

研究開発センター 3-102

TEL: 03-5292-3526 FAX: 03-5292-3527

E-mail: w-bridge@list.waseda.jp

URL: www.w-bridge.jp/

制作 W-BRIDGE

協力 松元貴志、西尾ゆかり

2011 Printed in Japan © W-BRIDGE